不思議な来訪者

岩瀬馨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不思議な来訪者

【Ｎコード】
Ｎ３４３７Ｗ

【作者名】
岩瀬馨

【あらすじ】
一人暮らし中の主人公、俊は、隣室のギタリスト、龍司と恋人関係にある仲。そんなある日、俊は龍司が部屋に女性を連れて行くのを目撃してしまい……。
拙サイトの連載を元にした番外編的短編です。必要か微妙ですが一応Ｒ１５程度ってことで。

（前書き）

拙サイト連載中のＢＬ小説「俺様至上ギタリスト！」の短編番外ストーリーです。この話単体でも普通に楽しめると思いますが、上記連載を知っているともう少し関係性が見えてくると思います。ただ、この短編は上の連載がもう少し先まで進展したあとの話ではありますが……。

凄まじい音を立てて地面を叩く雨の中、青樹俊（あおきしゅん）は傘を忘れ、鞄を傘代わりにして学校帰りの道を急いでいた。駅から家までの道は歩いて大体１０分。走れば５分程度だろうか。そんなことを考えながら、俊は土砂降りの雨の中を、家に向かって疾走していた。

「……あーったくもう、何で今日に限って雨なんて降るんだよ……！」

俊は誰にともなく不満をぶちまける。それというのも、今日は俊にとって一番大事な恋人と出かける予定だったからだ。その恋人とは、俊が一人暮らしをしているアパートの隣室に住む元ギタリスト、柳井龍司（やないりゅうじ）。もとはといえば龍司の一方的な好意であったが、そのうちに俊のほうが龍司に惹かれていった形だ。

普段は俺様至上主義で、人の都合などあまり気にも留めない。今回のデートもそんな感じだ。昨日の昼間突然言われて、『明日の夜７時に俺の部屋に来い』と一方的に約束を取り付けられたのだ。俊自身はそういった龍司の言動には慣れているので、それに反論することも何も無かったのだが。

「よっし、見えてきた！」

アパートまでは、車道をはさんで反対側。車の列が切れるのを待って、すぐに渡れるように構える。だが――。

「あ、……あれ？」

俊が我が目を疑う。俊の隣の部屋、つまり龍司の部屋に入っていこうとする人影が確かに見える。それは間違いなく龍司と、そして……。

「女の人？」

龍司が扉を開けると、小柄な女性は少し急いで部屋の中へと入っていった。続いて、龍司が部屋へと入る。扉はゆっくりと閉まり、

そのまま開かれることは無かった。

「……なんだよ、もう」

俊は一部始終を目の当たりにして、雨にぬれるのも構わず鞄を地面に放り投げた。今日の夜のデートのことばかりを考え浮かれていた自分が惨めに思えてきて、俊は憤りを隠せなかった。

「俺が居るのに……、やっぱ、女の人のがいいんだ、龍司さんはっ」

はき捨てるようにそう言うと、俊は放り投げた鞄を拾い、駆け足で道を渡ると、自分の部屋へ飛び込み、ずぶぬれのままベッドへ倒れこんだ。

＊＊＊

それから数時間が経過した。

時計の針は既に8時を回っている。だが、俊は着替えることもせず、ただじっとベッドの上でうずくまっていた。

雨は未だに激しく振り続け、部屋の中まで凄まじい音が響き渡る。そんな音にかき消され、隣の部屋の物音なんていうのは一つも聞こえはしない。いや、たとえ雨が降っていなくても、きっと聞こえはしない。俊は布団を頭まで被り、執拗に物音から逃れようとしていたからだ。

だからこそ、扉を叩く音も俊の耳には入ってこなかった。

「……俊ッ！」

「うわっ！？」

何度もしつこくドアを叩いても返事が無いのに苛立ったのか、龍司が勝手にドアを開け、部屋の中でうずくまる俊の元まで駆け寄ってきた。

「な、何だよ、勝手に入ってくるなよ！　大体、いつの間に合鍵なんて……」

「俺の所為にするんじゃねぇよ。お前が鍵を掛け忘れていただけだ。

それより……、お前、人との約束をすっぽかしといて、勝手に入ってくるなとは、ずいぶんと言うようになったじゃないか？」
龍司はあからさまに苛立っていた。約束の時間になっても部屋に来ず、1時間以上も待たされた挙句この態度では、それは当然といえば当然だろう。
「恋人との約束に遅れるようじゃ失格だぞ、俊」
「よく言うよ。龍司さんこそ、女なんか連れ込んじゃってさ。何が恋人だってんだよっ！」
「女……？」
龍司が首をかしげる。
「何を言ってんだ？　俺は女なんて連れ込んだ覚えはねぇし、今後も連れ込む意志なんかねぇ。連れ込むくらいなら、お前を連れ込むさ」
「嘘言ったってわかるんだよっ！　俺、この目で見たんだからさ。もう知らないよ、帰れッ！」
俊はそう言って龍司の肩をドンと押す。だが、龍司はその肩を掴み、力強くベッドの上に俊の身体をたたきつけた。
「痛っ……、な、なにすっ……！？」
「おい、俊」
俊は龍司に対してそれ以上言葉を発することが出来なかった。これまで俊の前で見せなかった威圧感が、今俊の前に居る人物の印象をまるっきり変えてしまっていて、俊は恐怖すら覚えていた。
「……いいか。もう一度言うぞ。俺はお前以外の人間になんか興味ない。女を連れ込むぐらいなら、……お前をこうするってな」
「な……、ちょ、龍司さっ……、何をっ！？」
「着替えだよ。……そんなびしょぬれじゃあ、風邪引くだろ？」
「なっ、き、着替えぐらい、自分で……」
「いいから、じっとしてろ」
龍司は低い声で俊を制する。その威圧感の凄まじさに、俊はそれ以上抵抗するすべを失った。

「このアパートにはな、防犯カメラがあるんだよ。お前が見たって女が本当に居るんなら、写ってるはずだろ？」
「な、ならっ……、それを確認すればいい話じゃっ……」
「その前に」
俊の衣服を剥ぎ取りながら、龍司はさらに重い声で続ける。
「俺の言葉が嘘じゃねぇってことを、お前の身体で思い知れよ」
「りゅ、龍司さん……、何を……」
「何をって、判ってんだろ？　こういう体制で、他に何をするんだ？」
「ちょ、ま、まって……」
「誰が待つかよ」
龍司は自らも上着を脱ぎ、俊の上に覆いかぶさる。
「よく思い知れよ。俺がお前をどれだけ愛していて、俺の言葉がどこまで真実なのかを、その身体でよ」
龍司はそう言って、何かを言おうとしていた俊の唇を無理やり塞いだ。
「……ん、……くっ、……り、……龍司さっ……」
「抵抗しようとするんじゃねえよ？　ただ痛いだけだからな。少しでも楽に終わりたいなら、俺に身をゆだねてればいい話だ」
「ひ……」
生まれたままの姿にされ、ベッドに押さえつけられた俊は、既にまな板の上の鯉と化していた。俊に残された選択肢は、龍司の怒りを素直にその身に受けること、あるいは、龍司に反抗し、苦痛だけを味わうこと、その二択だった。
「……ほら、俊。力抜けよ。……痛いほうがよければ、そうするけどな」
「う……、わ、わかったよ……」
俊は観念したように全身の力を抜き、自分の全てを龍司に預けた。

＊＊＊

「……俊、痛むか？」
ベッドの上で横たわったままの俊に、龍司は小さく囁きかける。
「……い、痛むよ。俺を大事に思ってるなら、……せめてもう少し、やさしくしてくれてもいいんじゃねーの？　力入れなくても、痛かったんだけどさ……」
「そりゃあお前の自業自得、俺を疑った罰って奴だ。ほら、服を着ろよ。証拠、見せてやるからよ」
「ちょっと待って……。まだ、腰が立たないからさ……」
「立たないなら、俺がお姫様抱っこで連れて行ってやろうか？」
「た、立ちます立ちます。……はぁ」
俊はよろよろと生まれたての小鹿のような足取りで自分の服を集める。

俊が連れて来られたのは、1階の角にある管理人室だった。とはいえ、普段は誰もいないこの部屋は、防犯カメラの機材以外は何も置いておらず、埃だらけの空き家となっていた。
「けほっ、けほっ……、すっげぇ埃……」
「ほら、これだ。この映像を見ればすっきりするだろ？」
龍司はカメラの機材を操作し、俊が帰ってきたのとほぼ同じ時間の映像を画面に映す。
「この時間だろ、お前が帰ってきたのは」
「そうそう、この時間。あ、龍司さんが帰ってきた」
大通り側に向かって付けられたカメラは、確かに龍司の帰宅の瞬間を捉えていた。だが、そこに昼間見た女の人の影はない。
「あれっ……、おかしいな、確かに女の人、居たのに……」
「ほらみろ、どうせお前の思い過ごしか何かだろ。言っただろ、女を連れこむくらいなら、ってよ」
「俺が帰ってきたね……。おかしいな、じゃあ、何だった……」
何だったのか、そう言おうとした俊の表情が凍りつく。

「……何だ？　カメラに何か……」
そう言って向き直った龍司の表情も、一緒に凍りついた。
龍司の部屋のさらに奥、つまり、今俊たちがいるこの部屋の扉。扉は閉まっているのだが、そこから、髪の長い女性がゆっくりと外へと出てきたのだ。それも、扉をすり抜けながら、半透明の姿で。
「ああっ！　この人だ、俺が昼間見た人ッ！」
女性はゆっくりと扉から抜け出し、大通りの方へと向き直り、その瞬間、煙のように消えてしまった。
「……」
「……」
流石の龍司もこれには驚いたようで、二人は揃って固まってしまっていた。
「ね、ねぇ、龍司さん……」
「知らんっ、俺は……何も見てない」
「声が震えてるよ。……ひょっとして怖いの？」
「ば、馬鹿野郎！　俺に怖いものなんてあるかよ！」
そう言いながらも、龍司の顔は明らかに青ざめていた。だがそれは俊も同じことだ。
「……と、とりあえず、俺の部屋に来いよ。茶、淹れてやるからよ」
「……うん、判ったよ」
俊はくすくすと笑いながら小さく頷いた。さっきまであれほど凄まじい威圧感を放っていた大の男が、幽霊におびえている姿は、なんだかとても可愛く感じたのだ。
「で、龍司さんは何をしてんの？」
部屋に戻るやいなや、タウ〇ページを開きながらぶつぶつと何かを言っている龍司。
「……ねえ、龍司さんってば」
「うるせえな。俺は今忙しいんだ」

「忙しいって？」
「……っと、寺、神社、教会、陰陽師……」
どうやら除霊を出来るところを探しているようだ。
「……龍司さんって」
「何だ？」
「いや、何でもないよ」
色々とひどい目にはあったが、龍司が普段見せない一面を見れたことと、本当に龍司が自分のことを愛してくれているのが判って、俊にとっては少しだけうれしい一日だった。龍司は自分の気持ちが疑われたとき、本気で怒っていた。それは即ち、龍司の気持ちが俊以外にはないということの裏返しでもあったからだ。

その数日後、アパートには数人の僧が呼ばれ、やたらと大規模な除霊の儀式が行われたという。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3437w/

不思議な来訪者

2011年9月2日01時21分発行